

介護老人保健施設しおさい

症 例 概 要 ご利用者：70歳代・ 男性・要介護1

利用期間： 令和7年8月～通所リハ利用

病 名：脳梗塞後遺症(右半身不全麻痺)

既往歴 ：肺癌(ステージ3で患部を切除)、内頸動脈狭窄(ステント留置術 施行)、
高血圧症

経 過：妻と二人暮らし。令和6年7月、脳梗塞発症。リハビリ病院退院後は、
他事業所の訪問リハビリテーション利用も活動性の低下や対人交流の減少により自
信を失い、しおさいの通所リハビリテーションを利用されたご利用者。当初は通所す
ることや対人交流を強く拒否されていたが、多職種で通所時の生活に寄り添い、ご利
用者の想いを汲み取ることで、会話や表情が豊かになり、自主トレやレク活動など通
所生活を楽しんで過ごされ、更に自宅でも自ら家事に参加される日々を取り戻された
症例。

内 容

脳梗塞発症後、病院でのリハビリを経て自宅復帰されましたが、屋外歩行が困難で家事も行えず、一
人で留守番もできないほど転ぶことが多く、活動性が大きく低下していました。また、仕事をされている奥
様以外との交流機会が少なく、対人交流への自信も失われ、自宅では再発への不安を抱えながら生活
されていました。不安を抱え介護をされていた奥様の勧めにより、安全な生活動作の獲得と介護負担軽
減を目的に、しおさい通所リハビリの利用を開始されました。

利用当初は病気の再発への恐怖から外出や他者との関わりを強く拒み、職員が話しかけても下を向い
たまま無言で過ごし、一人で離れてしまうこともありました。そこで、ご本人の思いを丁寧に傾聴し、安心
して過ごせる環境づくりを行いながら、少しずつ関わる職員を増やして信頼関係の構築に努めました。

ご本人の「右手を使って生活したい」「外を歩けるようになりたい」という目標に対し、医師が再発への
不安を軽減できるよう説明を行い、安心感が得られたことでリハビリにも積極的に取り組まれるようにな
りました。右手の機能訓練や屋外・階段歩行練習を実施し、栄養課と連携して食器配置を工夫すること
で、箸やスプーンを使用した食事動作が可能となりました。また、介護職員と協力して衣服操作を練習
し、入浴やトイレ場面でも右手を活用できるようになりました。

さらに、「家で皿洗いや洗濯を手伝いたい」と奥様を気遣う思いを受け、介護職員と栄養課が連携し、
おやつ作りや皿洗いを実践しました。これを契機に他利用者との交流が生まれ、笑顔や会話が増加し、
自主運動にも意欲的に取り組まれるようになりました。

現在では杖歩行や杖なし歩行が可能となり、自宅では奥様を助けるため食器洗いを行うまでに回復さ

れています。奥様からも「こんなに楽しそうに通うようになるとは想像できなかった」と喜びの声をいただき、ご本人は「しっかり立って洗濯物を干せるようになりたい」という新たな目標に挑戦されています。多職種が連携し、ご本人の思いに寄り添い続けたことで安心感と自信が育まれ、自ら職員や周りのご利用者に笑顔で冗談を交えて話しかけられるようになりました。拒否と不安の強かった利用開始時とは想像がつかないほど自分らしく生きる力を取り戻し、毎日がキラキラとした笑顔に繋がった症例です。

【施設医師】：主病や既往に対する状態観察と情報共有を実施し信頼関係の構築を支援

【連携室】：医師の診察やご家族のリハビリ会議への参加支援を行った。

【看護師】：定期的な声かけを意識し、本人が安心する生活環境を構築。

【通所介護職員】：日常動作時の声かけ支援、話の傾聴。レクリエーションの提供。

【栄養課】：本人に寄り添い食事環境の整備と支援を実施。おやつ作りの提供。

【リハビリ】：歩行練習や上肢機能訓練を継続的に実施。自主トレーニング方法を提供。